

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のことで

「死んじやうよ。命を守ろう」は
未就学児にわからない

ここまで「価値とリスクの天秤」を柱に書いてきましたが、価値どころか、保育者の責任が100%という場合も当然あります。典型的なのは、災害。地震で一気に建物が倒壊したならおとなにも判断の余地はありませんが、水関連の災害や熱中症（暑熱災害）では、おとなが事前にする判断、あるいはその場でする判断がすべてです。^{*1}子どもは自分で自分の命を守ることはできません。

もちろん、「地震を感じたらここに集まる」というような訓練は大切です。子どもはおとな以上に「習慣の生き物」ですから、繰り返し身につきませす。でも、おとなと同じ意味の「死

おとなの判断がすべて。 災害から子どもの命を守る

6

掛札逸美

KAKEFUDA Itsumi

心理学博士

保育の安全研究・教育センター

心理学博士（健康／社会心理学。専門は安全とコミュニケーションの心理学）。1964年生まれ。筑波大学卒。健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、NPO 法人保育の安全研究・教育センター設立（2020年に任意団体化）。厚生労働省「平成27年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証委員等も務める。

を理解するのは、小学校中学年ぐらい。「くしたら死んじやうよ」は、未就学児にとって「ウサギがお星さまになった」と同じで、自分の命を守る判断の理由にはなりません。

同じことは、水の事故でも言えます。子どもは水が大好きですが、その危険を知りません。「プール活動を通じて水の怖さを伝えたい」と

言う先生もいますが、私は「縁起でもないことを口にしないでください」と必ず言います。あなたは、水が怖いと知っていますよね？ 溺れる体験をしたから？ 大多数の人はそうではないはず。 「死」を理解すれば、水の怖さはわかります。水中で苦しい経験などする必要はありません。「水の怖さを知る」ような経験はPTSD（心的外傷後ストレス障害）につながりかねません。まして、死んでしまったら？

人間の脳は、判断の「失敗」を嫌い、 避けようとする

にもかかわらず、災害のたぐいのリスクには、認知バイアス（Ⅱもの見方の歪み）がつきもので、判断を誤りがちです。

たとえば、「熱中症予防指数が〇〇だから、中で遊ぼう」「明後日は台風が直撃する予報だから、『登園をお控えになるようお勧めします』と今のうちにメールを出そう」。熱中症は急性調が悪くなり、救命できないこともあります。台風が直撃したら、お迎え中に被災する親子がいるかもしれません、園が孤立するリスクもあります。他人の子どもの命を仕事として預かる専門家にとっては不可欠な判断です。

ところが…！ こうした判断を重ねるうち、次第に「熱中症予防指数は〇〇だけど、大丈夫だよ。外で遊ばせよう」「台風が来るみたいだけど、たいしたことはないよね」という気持ちが増えていくのです。

なぜか？ 人間の脳は「判断が正しかった」という経験よりも「判断を誤った」という経験に重きを置きがちだからです。

たとえば、こんなありふれた事例。

「明後日、雨だつて。△△は中止だね…。」

（当日）「晴れ！ 実施すればよかった…。」

この後悔は「自分の失敗」であるかのように記憶に残ります。人間は感情的にいやな記憶に

重きを置きがち（ネガティブイティ・バイアスと呼ばれる認知の歪み）なために、「できたはずなのに、中止にしてしまった」記憶は、「雨が降ったから、中止にしてよかった」という記憶よりも強く残り、次の判断に影響を与える（Ⅱ大丈夫+また失敗するのはいやだ）のです。実際は、失敗でも成功でもなく、単に「天気」という人間のコントロールが及ばないものの結果にすぎないのですが…。

行事を中止にしたり、外遊びをやめたり、「明日の登園は危険かも」と伝えたりすれば、保護者からいろいろ言われもするでしょう。それもまた、自分たちの失敗であるかのように認識してしまう。そして、こうした「失敗」（と脳が認知してしまうできごと）をなるべく避けようという判断に偏っていく。これが、災害や暑さの時の真の被害につながります。

「台風直撃！ 休園にしてよかった！」 とプラスの経験を

人間の脳は「雨の予報で中止にしたのに、晴れた」「休園にしたのに、台風がそれた」「なんでも中止（休園）？」と保護者に言われた」といった、後悔／失敗と認知されてしまう感情が強くなってしまい、後の判断を歪める。

では、どうすればよいのか。

「やっぱり雨になったね。中止にしてよかった！」「予報が当たって台風直撃。休園にして

よかった」という（通常は意識にのぼらない）プラスの記憶を、職員同士で、保護者との間で意識して言葉にしていくことです。これが「自分たちの判断（努力）によって被害を避けられた」という認識の蓄積につながります。たとえば「台風がそれて、保護者から「休園にしないでよかったのに」といやみを言われたとしても、「そうですね。直撃しなくてよかったですね（ニッコリ）」とさえいいこと。自然現象にはそもそも人間の力が及ばないので、用心しておいて損はありません。

「自分たちが判断しているから何も起きていないんだ」「何も起きないのが当然、ではないんだ」という感覚を育てていくこと。そうすることで、災害に関する判断だけでなく、毎日の判断も揺るがなくなっていくでしょう。

「熱中症指数が〇〇だから、中で遊ぼう。昨日も中で遊んだから、みんな、大丈夫だったんだよ」。暑熱災害は判断が難しいという点をお忘れなく。水や地震がらみの災害は、「損害はあつたけど、私たちが判断したから最悪の事態だけは避けられた」という学びの経験がありえます。暑さにはこのような学びの経験が（ほとんど）ないまま、ある日突然、誰かが倒れるのです。熱中症を甘く見ないでください。

*1 「保育の安全」(検索)サイト↓「安全のトピックス」
↓「8 気象事象、災害」(改訂版)